

ツクネグモの造網行動

新 海 明 *

Web-building behavior of *Phoroncidia pilula* (Karsch)

Akira shinkai*

ツクネグモ *Phoroncidia pilula* (Karsch) はスギやヒノキなどの葉間に、垂直方向に粘球の付着した長さ 20 ~ 50 cm の糸を一本張っただけの条網を張るクモとして知られている（新海・高野, 1984 : 新海, 1988）。本種の網には現在まで知られている限りではタマバエ科 Cecidomyiidae のオスばかりが餌としてかかっており、このことは本種がなんらかの誘因物質を出している可能性を示唆している（新海, 1988）。

筆者は、1990年4月に千葉県において本種の造網行動を観察したのでここに報告する。

本稿をまとめるにあたり、新海栄一氏には原稿の校閲をお願いした。ここにお礼申しあげる。

方 法

調査は1990年4月28日に東京大学千葉演習林（千葉県君津市）で行った。ツクネグモはメスの成体であり、枯枝とコアカソの間に造網していた。

造網過程については粘糸を張る時の脚の使い方やその状態を中心にして観察した。完成後の条網については全体の長さと粘球の付着している部分の長さを測定した。なお、標本は採集していない。

結果と考察

本種を発見したのは午後3時38分であった。ツクネグモはほぼ垂直に張られた糸（長さ23cm）の下端にいた。この糸には粘性はなかった。暫くするとクモは上方に向かって糸をたぐりよじ昇り始めた。よくみると粘糸を張り始めたところだった（図1-a）。

まず、クモは上方の糸を切りそれを1. 2脚で巻きあげ、同時に糸疣より粘糸を引き出していた（図1-b）。つまり、クモは前方の巻きあげた糸と後方の粘糸との間で「a living bridge（宙吊り状態）」となっていた。また、この時に第4脚を使っての粘糸の引き出しはしなかった（図2）。これはコガネヒメグモ *Cryssot venusta* が粘糸を張る際の行動と同じものである（新海、未発表）。このようにしてクモは粘糸を引き出しながら 18.5 cm ほど上へのぼると、粘糸の引き出しをやめ（図1-c），約 1 cm ほど上方へ行くと反転して頭を下方へ向けた（図1-d）。そして、その糸を切り今度は第3. 4脚を使って「後ずさり」しながら後方の糸を巻きあげていった（図1-e）。このために前方の粘糸の緊張は一層高められることになった。粘糸を張り初めてからここまでに要した時間はわずか 60 ~ 70 秒であった。

* 185 国分寺市本多1-6-6

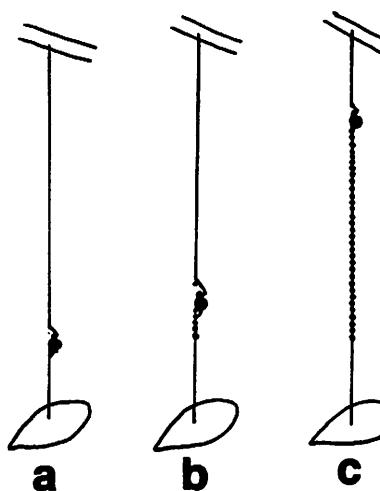


図1 ツクネグモの造網過程

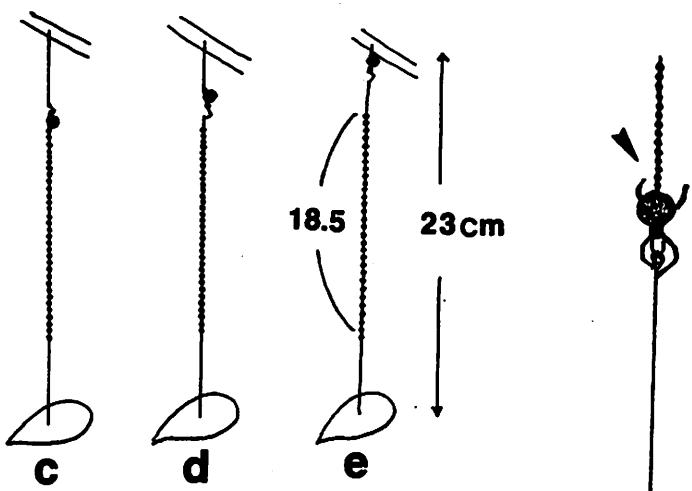


図2 粘糸を張るツクネグモ。第4脚は粘糸の引き出しをしない(矢印)。

完成した網上でクモは前方の粘糸と後方の巻きあげられた糸との間で「a living bridge」となっていた。この状態はオウギグモ *Hyptiotes affinis* の待機姿勢と極めてよく似ていた(Foelix, 1982)。同様な仕組みをもつ網は、この他にマネキグモ *Miagrammopes orientalis* (中平, 1961) やコガネグモ科のマメイタイセキグモ *Ordgarius hobsoni*, ムツトゲイセキグモ *O.sexspinosis* (新海・新海, 準備中), カラカラグモ科のカラカラグモ *Theridiosoma epeiroides* (新海・新海, 1985)などが知られている。このように、網に餌がかかった瞬間に網の張力をゆるめて効果的に粘糸を餌に絡めるという仕組みは、網にかかった餌の捕獲をより確実にするための適応だと考えられる。

引　用　文　献

- Foelix, R. F., 1982. *Biology of spiders*. 306p., Harvard Univ. Press, Cambr., Massach., and Lond., England.
- 中平清, 1961. 高知県のクモ. *Atypus* (23/24) : 27 - 60.
- 新海明, 1988. ツクネグモの条網とその餌について. *Atypus* (92) : 37 - 39.
- 新海明・新海栄一, 1985. 造網構造と餌捕獲行動からみたカラカラグモの網の由来についての一考察. *Acta arachnol.*, 33(1) : 9 - 17.
- , 準備中. ムツトゲイセキグモの投げ縄作成行動.
- 新海栄一・高野伸二, 1984. フィールド図鑑クモ. 204 p., 東海大学出版会, 東京.

蜘蛛の発見・採集法のあれこれ

貞元己良*

イソコモリグモ編

イソコモリグモは、北海道、本州（鳥取県から青森県までの日本海沿岸、青森県太平洋沿岸）に分布する大型のコモリグモで、主に海岸砂丘に穴を掘って住むクモであるが、このクモの発見方法と採集方法をいくつか述べてみたい。

(1) 発見方法

このクモは、日頃あまり人の入らない砂地を好む傾向にあり、夏の間海水浴場となるような海岸にはほとんど姿を見ることが出来ない。

さて、発見方法であるが、一つの点に注意すれば誰でも見付けることが出来る。もちろんイソコモリグモは夜行性なので、昼間は巣穴を閉じているので見付けるのは容易でないが、夜間であるならば簡単である。その一つの点というのは、カニの穴とクモの巣穴を間違えないようにするということである。カニの穴は、穴から堀りだした砂を一方向にのみ捨てるのに対し、イソコモリグモは、穴から堀りだした砂を巣穴の周囲約10～15センチメートルぐらいのところに捨てる習性を持っているので、この点に注意すれば存在を確認することが出来る。

(2) 採集方法

巣穴を見付けたら、懐中電灯でそっと穴のなかを覗いてみる。すると、ほとんどの場合クモは餌を取るために巣穴の入り口付近で外をうかがっており、目と目が合って一瞬ギョとする結果となる。しかし、いざ採集となるとクモは巣穴の奥深く逃げ込んでしまい、採集するのは大変に難しい。そこで、私を含め何人かの私の知る人達の絶妙な採集テクニックをいくつか紹介したい。

(a) 貞元式採集方法

私の場合テクニックは全く無しで、最も原始的な方法である。それは、まずクモの居る巣穴を見付けたらクモが穴の入り口付近に居ることを確認して、静かに1メートルほど離れ、おもむろにスコップを取り出してスコップに全体重をかけ、巣穴の下約10センチメートルぐらいのところを目掛けて、一気にスコップを砂のなかにめりこませる。そして静かに持ち上げると、逃げ場を失ったイソコモリグモが飛びだしてくるという寸法である。

(b) 熊田式採集方法

熊田氏の採集方法は、実に発想がユニークなので紹介したい。それは、まずクモの居る巣穴を見付けたら、おもむろに周辺の乾いた砂をサラサラと巣穴に流し込んで行く。クモは砂に押され穴の一番奥まで逃げ込んで行くが、それでも更に砂を入れ続け、巣穴が完全に砂で塞がったら、スコップで周囲から大きく掘り始める。掘っていくと分かることだが、深く掘れば掘るほど砂はだんだんと湿ってくることに気付く、そして巣穴があるであろうと思われる箇所を探ってみると巣穴の壁が壊れ、先ほど入れた乾いた砂が吹き出してきて穴の位置が明確に分かり、乾いた砂の一番奥にイソコモリグモが潜んでいるという訳である。

(c) 新海（栄一氏）式採集方法

新海氏の採集方法は、非常に単純ではあるがかなりの修練と高度のテクニックを要する技であるので紹介したい。それは、まずクモの居る巣穴を見付けたら、付近に生えている雑草の茎若しくは細長い葉の部分を探ってくる。そしてその茎若しくは葉を巣穴に突っ込んで、クモに噛ませ静かに釣り上げるという方法である。

このやり方の利点としては、クモが成体か幼体か、またオスかメスかが瞬時に判断することができ、目的の物でなければそのまま放す訳であるから、巣穴を壊す事もなく最も合理的に採集が出来る方法といえる。しかし、簡単そうではあるが、実際にこの方法を試してみると、何度も慎重にやっても全く出来ないことに気付く。新海氏によれば、「百発百中」とのことであるが、私には到底出来ない技であった。

キジロオヒキグモ編

キジロオヒキグモは、本州・四国・九州に分布するクモではあるが、発見例が大変少ない種類のクモである。私自身としては今まで、東京の五日市でメスを2回・高尾山で幼体1回、卵のう1回・八王子城址で幼体1回・伊豆でオスを1回（3頭）を、それぞれ約10年間の間に発見している。私がこのクモを発見した感じ（霧囲気）を、率直に述べるとするならば、探す場所をちょっと工夫すれば、もっと沢山発見されてもいいような気がするクモである。

(1) 発見方法

一口に発見方法といってもクモが居るであろう所を探さねば見つかる訳も無い。主に、針葉樹林内や竹林内に見られ、その他にもそれにごく近い環境、例えば太陽の光があまり届かない雑木林のなかでも地面が湿っていて、手を大きく広げても木々の枝が指に当たらない程度の空間の多くあるところ。または、針葉樹林や竹林が生えているところとそうでない平地若しくは、草原地帯との境目で、太陽の光があまり届かないところ等を、重点に探せばメスは確実に見つかる。

オスは、メスと同様に前年の秋に卵のうから出ろした後、バールニングをするのかどうか分からないが冬でも枯れない植物、例えば笹のような植物の葉裏で越冬をしているようである。そしてもちろんのこと、越冬する笹の生えている場所は近くに針葉樹林か竹林が、生えていることが条件である。

(2) 採集方法

晩夏から初秋にかけて、運良くこのキジロオヒキグモの成体を発見できればいいが、なかなか上手くいくものではない。そこで、メスであるならば個体数が最も多いと思われる幼体の時期と、オスであるならば越冬中の個体の採集方法を述べてみたい。

(a) メスの場合

メスは年が明け、活動できる気候になると、多分2月頃から4月頃までの間に日の出ている日中に限り、かなりの早さで他のクモが引き回した糸や草・枝を伝って網を張るべき場所に目指して、移動していると思われる。よって、この状況を頭に入れたうえでハンドソーティングなりビーティングを針葉林や竹林近くで行なうと、効果的である。

5月から6月頃は、それぞれ目的の場所で網を張っていると思われる所以、それらを探すといい。幼体のメスは、成体と違いかなり低い位置に垂直若しくは、やや斜めの網を張るようで、目を地表面に向けて探すのがコツである。

(b) オスの場合

オスは越冬中を狙うのが、最も採集しやすい。オスは冬でも枯れない笹の葉裏で越冬するが、これが解っているからといってどんなに強くビーティングで叩いても、絶対に落ちてはこない。それは、葉裏の葉脈の部分に糸で幕を造りその中でじっとしているためで、面倒でも一枚一枚葉をひっくり返して、目を皿の様にしてじっくり見て探すのがコツである。

ムツトゲイセキグモ編

ムツトゲイセキグモは、日本に産するナゲナワグモ類の一種で、自分の身体から放出した性フェロモンでガの一一種、ヤガ科のシロモンオビヨトウのオスを誘引し、粘球の付いた「投げ繩」で獲物を捕らえているといわれている。分布は、現在までのところ本州（関東地方以南）、四国、九州、南西諸島である。

私が、初めてこのムツトゲイセキグモを発見したのは1985年の6月で、場所は高尾山の麓、国道20号線から少し山へ入った、栗の木の林の中である。その時刻は、既に太陽が沈み肉眼でクモを発見するのは、不可能な時間帯だったのを覚えている。私は、暗くなってきたので帰ろうと思い何気なく空を見上げたところ、視線の先約50センチ程のところで、クモが一頭これから網を張るであろうと思われる姿勢で葉の裏から糸にぶら下がっているのを見付けた。これが私にとって最初のムツトゲイセキグモの発見だった。それから毎年同じような環境を探して、高尾・裏高尾・五日市・秋川等でこのムツトゲイセキグモを発見している。

そこで私は、このクモを発見するために、どの様な点に注意して探しているのかを述べてみたい。

(1) 発見方法

今まで私が、このムツトゲイセキグモを発見した場所・環境等を総合的に判断し、得られた結論として述べられる発見方法のポイントは、まず第一に周囲が暗闇になるところ、第二に栗・くぬぎ・すすき・椿等の植物が生えているところ、第三に高さとして地上から1メートルから2メートル程度を目安にしたところである。

ここまで書けば、普段野外観察をしている方であるならトリノフンダマシ類と同じ環境をしていることに気付くはずである。つまり、ムツトゲイセキグモはトリノフンダマシ類とほとんど同じ環境に生息していると考えられるのである。よって、トリノフンダマシ類が沢山生息しているところであるならば、ムツトゲイセキグモや近縁のマメイタイセキグモも発見できる確率は、非常に高いといえるのである。

ただし、マメイタイセキグモに関しては、私自身発見例が少ないため、断定したことは言えないが、トリノフンダマシ類の居る環境よりも近くに雑木林があるならばその中の山があるならば少しでも入ったところに生息しているような感じがするのである。

(2) 採集方法

採集方法というのは特別に無いが、ただ注意して頂きたいことは、このムツトゲイセキグモは国内でも非常に希な種類であるためその生態がほとんど解っていないので、もし運良く発見された際はすぐにアルコール瓶に漬けること無く、観察記録等を取るなどの措置を講じてもらえば幸いである。毎日観察していると分かることであるが、このクモはそれほど大きく移動はしないようである。

余談ではあるが、私自身このムツトゲイセキグモについて、発見はしても標本は一頭も作ってはない。

オウギグモ編

オウギグモは、私達クモの愛好者にとってはそれほど珍しいというクモではないが、実際探してみると意外に発見の出来ない種類のクモである。それはこのクモが、他のクモ達とは違い少々異なった環境に生息しているからであろうと推測できる。

フィールド図鑑のP. 188 を引用すると、林内の薄暗い所、枝葉間に扇網を張る。クモは扇のかなめで網全体を引いて獲物がかかるのを待つ。出現期：9～11月。分布：本州、四国、九州。体長：♀ 5mm, ♂ 4mm. とある。そこで私は、もう少し具体的に発見方法等を述べてみたいと思うのである。

(1) 発見方法

まずオウギグモが生息する環境であるが、このクモは局地的に多産する傾向にあるといわれております、その理由としてはやはり餌もさることながら、かなり狭い空間とある程度限定された条件の下でのみ生息が可能であると考えられるのである。

普通に山へ入って見つけるときは、狭い空間、つまり網を張るクモにとって大きな網の張れないところ、大人の身体で言えば腰よりも低い位置に視線を向けること、次にどんな所に網を張っているのかであるが、一番多く見られるのは杉の木の根元若しくはその周辺等が確実である。しかしこれも注意しなければならない点がある。それは、日中太陽の光がほとんど当たらないような薄暗いところであって、地表面がわりと湿っているかそれとも落葉や枯れ木枯草などがわりと多くあるところというのが条件である。しかしこれも、絶対的という訳ではない。

私は、私がそれぞれ個々のクモを発見する目安として、それぞれ個々のクモが生息可能な環境であると判断される場所を多く見て、得られた結果述べることであるので、この点はご了承願いたいのである。

(2) 採集方法

オウギグモが網を張り、扇網のかなめの部分で静止している姿は大変に見つけにくく、杉の葉の先端に居るものは枯れた杉の葉と寸分変わらぬ姿をし、又枯れ枝の先端部分に居るものは枯れ枝と全く見分けが付かない。そして糸も非常に細く見にくいのに加え薄暗いところに網を張るため、肉眼で見つけるのは熟練が必要と思われる。

そこで簡単に発見・採集する方法として、懐中電灯を用いる方法がある。懐中電灯を照らしてオウギグモを探した場合、クモ本体を見つけることが出来無くとも、網が張れそうな空間を色々な角

度から光を照らしてみると、必ず網が見えてくる。そして網を見つけたら、扇網のかなめの部分に目を移して行けば、簡単にオウギグモを発見し採集することが出来るという訳である。

ゴマダラヒメグモ編

ゴマダラヒメグモは、河原の石の下に潜みそこからハンゲツオスナキグモのような不規則網を張りだすクモで、フィールド図鑑P. 37によると現在まで中部、関東地方以外では採集されていないというクモである。

私自身は、今から3年ほど前にこのクモがどんな所に生息しているのか知りたくて三日間ほどかけて、東京都と神奈川県の境を流れる多摩川において、このクモだけを狙い探し採集したことがあるのでそのことを述べたいと思う。

(1) 発見方法

一口に河原の石の下といっても、川の土手に立って河原を見渡したとき何処から手をつけたらよいのか分からぬ。

ゴマダラヒメグモがその主な生息場所として選んだところは、ちょっとした雨で増水しても流水がこないところ、または日当たりが良く水捌けの良さそうな乾燥したところである。このような場所は、土が水に流されること無く堆積しており、石もごろごろしているというよりも、むしろほとんどの石がその大部分を土が覆い、地表面は僅かばかりの雑草と石の一部がのぞいているといった感じである。

このような場所を見つけたら、着ている服が汚れることを覚悟してはいつくばり、目の高さを低くして探すのがコツである。それは何故かというと、このゴマダラヒメグモが石の下から出す不規則な網は非常に少なく、立ったままの姿勢で上から見た状態では見過ごす可能性が高いからである。

(2) 採集方法

ゴマダラヒメグモの網を確認したら、ピンセット等で網の一部に触れ軽く振動させてもクモは絶対に出てこないので、石の周りを根掘ではり、静かに石を持ち上げるとクモが潜んでいるのが分かる。

ヤエンオニグモ編

私がヤエンオニグモを初めて観察したのは、1976～7年頃の夏だったと記憶している。夕方、いつものように自宅近くの山へ散策に出歩いていた時のことである。ふと見ると、私の目の高さで一匹のオニグモが忙しく網を張り始めていたところだった。私はそれまでオニグモが網を張るところをじっくり見たことがなかったので、これはいいチャンスに巡り会えたと思い、その場に座り観察することにした。時間帯としては、太陽が沈んで間がない時であり、周囲はまだ明るい状態だった。しばらくオニグモが網を張っている様子を眺めていたが、どう考えても変だ、という気持ちになってきた。考えれば考えるほど幾つかの疑問な点が湧いてきた。オニグモは、亜成体かそれに近いぐらいの大きさであるのにもかかわらず、第一に網を張る時間が早過ぎるということ、第二に網を張る高さが低すぎるということ、第三に横糸の幅が普段見ているオニグモの網よりも広いよう

な気がするということ、第四に普段家の周りで見るオニグモが黒と表現するならば、このオニグモは薄茶色と表現できるということ、そして極付けは、第五として網を張り終えたこのオニグモは、最後にややいびつな隠れ帯を網の中心に作ったのである。

それでも私はオニグモと信じて疑わなかったので、オニグモの隠れた一面を発見したような気がして浮き浮きしながら自宅に帰ったのである。その後数日して、近くに住んでいる熊田氏にお会いする機会があったときに、先日面白いオニグモを観たと報告した。私の話を聞いた熊田氏は、いとも簡単に「それはヤエンオニグモだよ」と教えてくれたのである。

現在では、何処の山へ行ってもごく普通に観られるクモの一つとなつてはいるが、その当時は八木沼先生の原色図鑑にもまだ図版が載っていないクモだったので、そのクモがヤエンオニグモと知ったとき私は、とても誇らしい気持ちになったので覚えている。

(1) 発見方法

ヤエンオニグモは、平地よりも山間地、それもそれほど高くない山の山道沿いで多く見かけることがある。ただ山間は、網に居ることではなく前記したように夕方から新たに網を張りだすようではあるが、一度張った網は朝方たたむことも無くかなりぼろぼろになるまで使うようである。よって山間見るヤエンオニグモの網は、完全なものはなく、穴の空いた網が多い。そして、網の高さもだいたい地上から網の中心までは1.5メートル前後である。

ヤエンオニグモの住居は、草木の葉を曲げ糸で綴り雨・風・直射日光をさえぎるのに適した形を作っており、また住居と網は比較的離れたところにあるので、発見にはコツがいる。

(2) 採集方法

山間、山でヤエンオニグモの網を見つけたならば、網の中心付近を良く目を凝らして見ることが大切である。これは、住居と網の両方を持つクモ全てに応用出来ることであるが、必ず住居と網とを結ぶ呼糸があるからである。この呼糸はヤエンオニグモの場合、縦糸よりも細く縦糸のいずれかに沿って枠糸に至り、枠糸からいずれかの方向へ（上方ばかりとは限らない）向かって住居へとつながるのである。

住居を発見し、不用意に住居を手で触れたりするとクモは思わぬ方向に飛び出してアッと言う間に苦労が水の泡となってしまうので、住居を見つけたならば補虫網などをクモが落ちて行きそうな場所に設置して、採集するのが賢明である。

なお、私の体験上このクモは非常に毒が強いので、オニグモ程度と考えていたら痛い目に合うこととなる。

ジョロウグモの生息数調査

諏訪哲夫*

1988年12月より1992年3月までの予定で、神奈川県座間市のクモ類調査を実施中であるが、啓発の意味もあって市民参加の調査として、ジョロウグモの生息数をとりあげることにした。この調査は、市民が座間市の自然度を知る一つの手がかりにもなり、またクモに親しんでもらうよい機会になると考えた。

この調査に当って協力された藤野知弘、植松賢也、伊藤信裕、浅野寛の四氏、並びに当日調査に参加された市民の皆様にお礼を申上げます。

調査については、筆者が原案をつくり、調査地を座間市内の谷戸山と芹沢公園に設定した。調査は、1990年10月14日の午前中に実施した。

谷戸山は、約30haのクヌギ・コナラ林が中心で、調査コースはクヌギ・コナラ林の中央を走る林道500mの両側各1m、計1平方キロメートルである。この調査は、植松氏の指導する座間市公民館ふれあい自然科学クラブの中学生2名と植松氏、及び筆者で担当した。

芹沢公園は、クヌギ・コナラ林の間にスギ林、シラカシ林が混在している。面積約1.6haで1990年に1期工事として池や歩道、広場などを設けた。この調査コースは、歩道に沿った林縁1mを1km、計1平方キロメートルである。調査は、東地区文化センター・ひがし冒険クラブの小学生とその保護者計26名、それに指導者の伊藤氏、新森百合子氏、クモ類調査員の藤野氏が担当した。

調査に当っては、ジョロウグモ♀、♂の原色拡大図を用意して参加者に解説し、また最初の網のあった場所で实物について♀、♂を示し、調査法全般についても説明した。調査用紙は、B4判1頁に印刷したがその調査項目を表1に示す。

表 1

1 網を張った環境	a : 高木, b : 低木, c : 草
2 網の高さ	a : 1m以下, b : 1~2m, c : 2~3m, d : 3~4m, e : 5m以上
3 網の三重構造	a : あり, b : なし
4 雄の姿勢	a : 下向き, b : 上向き, c : 横向き
5 雄の大きさ	a : 3cm弱, b : もっと小さい, c : もっと大きい
6 雄を刺激したときの反応	a : 網を左右にゆする, b : 網を前後にゆする
7 雄の数 数字を記入	
8 雄の姿勢	a : 下向き, b : 上向き, c : 横向き
9 雄の大きさ	a : 1cm弱, b : もっと小さい, c : もっと大きい
10 備考	

調査の主目的は、1平方キロメートル当たりの雄の数にあったのだが、網の数、雄の数等についても併せまとめる表2のようになる。

大野正男（1985）によると、1976年の調査例では雄の数は東京芦花公園で1平方キロメートル当たり26個体、国立自然教育園20個体であり、座間市の生息数はかなり良い成績のように考えられる。し

* 神奈川県立涌谷西高校

表 2

	谷戸山	芹沢公園
網の数	58	107
雌の数	57	105
雄の数	37	83
同居していたクモ	メガネドヨウグモ1個体	なし

かし、この数値は单年度のものであり、少なくとも数年は同一の場所で調査をくりかえし、比較する必要がある。

特に、谷戸山と芹沢公園をくらべた場合、芹沢公園の方が個体数が多いが、これは谷戸山が林の中で暗く、芹沢公園が林縁で明るかったという環境の違いによるものなのか今後の研究課題にしたい。

表3は、表1に示した項目の調査結果を一部集約して表示したものである。市民参加の形で調査員が多い場合、調査項目内の類別は大雑把にした方がよかったです、雌の反応観察も網への刺激法がまちまちとなって無理な調査項目であったと反省している。

表 3

	谷戸山	芹沢公園
環境(高木+低木+草)の割合・他	100% (林の中)	100% (林縁)
網の高さ 1m以下	6.9	12.1
1~3m	75.9	77.6
3m以上	17.2	10.3
網の三重構造 あり	98.2	100
雌の姿勢 下向き	100	96.1
雌の大きさ 3cm以上	77.2	56.2
3cm以下	22.8	43.8
雌の反応 網をゆする	17.5	1.0
反応なし	12.3	31.4
にげる	35.1	60.0
未確認	35.1	7.6
雄の数 0	50.0	45.8
1	39.7	41.1
2	6.9	8.4
3	3.4	1.9
4
5	...	2.8
雄の姿勢 下向き	86.5	56.6
上向き	2.7	10.9
横向き	8.1	32.5
未記録	2.7	0
雄の大きさ 1cm以下	73.0	94.0
1cm以上	27.0	6.0

しかし、本調査を通してジョロウグモが小、中学生の観察材料として大変興味あるものであると再認識した次第である。

文 献

大野正男（1985）：すみかたで自然度をはかるジョロウグモ 指標生物 日本自然保护協会／思素社。

わら巻きの中で越冬するクモの一記録

諏訪哲夫*

1988年12月より1992年3月までの予定で、神奈川県座間市において市内の動物分布調査が実施されている。筆者はクモ類を担当しているが、庭の樹木に巻いたわら巻き中にクモが発見されることから、クモ類調査の一環としてわら巻きを試みた。本調査はわら巻きの数も少なく、場所や年度をかえての調査も行なっていないので甚だ不十分なものではあるが、野外におけるクモの越冬状況を知る一記録として報告したい。

作業にご協力頂いた藤野知弘、大木和生、浅野寛の三氏並びに調査したクモの同定にご協力頂いている池田博明氏に厚くお礼を申上げます。また、この調査にご理解を頂いた心岩寺住職白井正光氏に感謝いたします。

さて、わら巻きは1989年9月30日に市内心岩寺裏手のスギ・ヒノキ6本に、30cm幅の農業用の藁むしろを上下2箇所針金で留めるという方法で行なった。樹の直徑は20~50cmで、わら巻きの位置は地上160cm位のところである。わら巻きをしたスギ・ヒノキは、西向きの段丘崖斜面の墓域に生育し、ケヤキ・シラカシなどとともに林を形成している。

わら巻きをはずす作業は、1990年2月24日に実施したが、この年は異常な暖冬で作業中クモ類はかなり活発に動きまわり、1箇所のわら巻きではひそんでいた1個体のクモを見失い、種名が明らかにならなかった。

表 1

No.	樹種	直 径	クモの個体数
1	スギ	40cm	10
2	ヒノキ	50	11
3	ヒノキ	45	12
4	ヒノキ	20	3
5	ヒノキ	30	1
6	ヒノキ	50	7
計		235	44
平均		39.2	7.3

表1に樹種、直徑(160cm高)、クモの個体数を示した。わら巻きをした樹の直徑は、先にも述べたように20~50cmで平均39.2cmであった。クモの個体数は、最大12、最小1、平均7.3個体である。

表2は、わら巻き6箇所全体のクモ相を示したものである。個体のageを♂成体:M、♂亜成体:m、♀成体:F、♀亜成体:f、幼体:nの5つに分けて記録した。

* 神奈川県立瀬谷西高校

表 2

		M	m	F	f	n	計
ヒメグモ科	カニミジングモ	0	0	0	0	1	1
	ムナボシヒメグモ	0	1	0	0	0	1
	カレハヒメグモ	0	0	1	0	0	1
	オオヒメグモ	0	0	0	0	1	1
コガネグモ科	ヨツデゴミグモ	1	0	0	0	0	1
タナグモ科	ヤチグモ属 sp.	0	0	0	0	1	1
フクログモ科	ヤマトフクログモ	3	3	0	5	10	21
	フクログモ属 sp.	0	0	0	0	1	1
	カニグモ科	キハダカニグモ	2	0	0	0	2
エビグモ科	キンイロエビグモ	0	0	0	0	8	8
	キハダエビグモ	0	0	0	2	0	2
	ハエトリグモ科	メガネアサヒハエトリ	0	0	0	0	1
7 科	マダラハエトリ属 sp.	0	0	0	0	2	2
	14 種	6	4	1	7	25	43 個体
		13.9	9.3	2.3	16.3	58.2%	

タナグモ科、フクログモ科、ハエトリグモ科の幼体では、属までしか同定できなかったものもある。科別にみるとヒメグモ科4種4個体、オニグモ科1種1個体、タナグモ科1種1個体、フクログモ科2種22個体、カニグモ科1種2個体、エビグモ科2種10個体、ハエトリグモ科2種3個体であり、全体的には、6科14種43個体となる。亜成体を含む雌雄の比率はほぼ等しいが、成体雌雄の全体に占める割合は、前者2.3%に対し後者13.9であり、♀成体の比率は著しく少ない。また、幼体は58.2%で越冬個体の過半数は幼体であった。

文 献

井上智雄（1985）：わら巻きに入る小動物 指標生物 日本自然保護協会／思索社

座間市のクモ調査ノート (1)

池 田 博 明*

Notes on Spiders in Zama City (I)
Hiroyoshi Ikeda

神奈川県の座間市で採集されたクモの液浸標本を見せていただく機会があった。これらの標本は、1989年（平成元年）より本調査が始められた座間動物調査会（藤野知弘会長）の昆虫部会クモ類班（諏訪哲夫・藤野知弘・大木和生）の採集によるものである。調査は1991年1月現在継続中であり、目録などの正式な発表は1992年度以降だが、標本調査の中で得られた知見を「調査ノート」という形でいくつか報告する。

このような形での発表を薦められた諏訪哲夫・藤野知弘・大木和生各氏と、同定にあたって御助言下さった谷川明男・田副幸子両氏に感謝いたします。

1 再び採集された和名未定のフクログモ一種

本標本は大木和生氏が、1989年8月5日に座間市小池の遊水池わきの林縁で採集した雌成体である。非常に特徴のある外雌器を持っている（図1）。この種は既に平塚で雌成体が採集され、

Clubiona hummeli Schenkel, 1937として、記録されている（平塚クモの会, 1986）。外雌器の形態から中国名は「双弓管巣蛛」という。ここで言う管巣蛛とはフクログモを意味する。この時の同定者は新海栄一氏である。

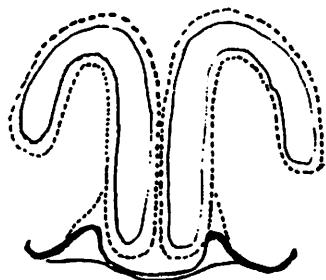


図1 *Clubiona hummeli* 雌の外雌器

ところが、平塚の目録が出た直後に届いた Korean Arachnology, 3 (1)で、南宮竣・金胄弼が新種として記載した *Clubiona salictum* の雌雄の生殖器の雌の図を見た私は仰天してしまった。*Clubiona hummeli* の雌のそれとあまりにもよく似ていたからだ。記載文には

「*C. negletta* O.P.Cambridge, 1862や*C. hummeli* Schenkel, 1937と似ているが、雄の脛節突起の形態やメスの外雌器の透けて見えるパイプ状導管で区別は容易である」とあった (Namkung & Kim, 1987)。しかし、図からではその違いがはっきりしなかった。これで平塚産のものが、*C.hummeli*なのか、*C. salictum*なのか、分からなくなつた。

しかし、白甲麻は最近の韓国産フクログモのモノグラフで *C. salictum* の雌を *C. hummeli* のシノニム（同物異名）として、*C. salictum* の雄を *C. propinqua* L.Koch, 1879 のシノニムとして、扱っていた (Paik, 1990)。

これで本種の学名はひとまず、*Clubiona hummeli* に落ち着いたことになる。しかし、どう

*神奈川県立青少年センター
Kanagawa Prefectural Youth Center

も問題は片付いていないように思われる。というのは、*C. salictum* の雌雄は同じ場所の同じ habitat で (Aroadside-tree of *Salix babylonica* in Uijongbu-shi of Kyonggido, Korea), 同時に (1, Dec. 1986) 多数 (雄 40 頭, 雌 23 頭) 採集されていて、同種の雌雄のように思われるからだ。また、冬期、街路樹の巻きワラの *Cladonia* の約 8 割はこの *salictum* であり、採れるクモの 34 ~ 37 % を占めて、最優占種でもあるという (Kim, M. C. Lee and Jun, 1987 : Kim, H. P. Lee and Jun, 1990).

さらに妙なことがある。*C. propinqua* はシベリアから雄のみで記載され、*C. hummeli* は中国から雌雄で記載されたのだが、1987年に林俊夫が北海道俱知安産の標本に基づいて、*C. propinqua* の雌を初記載しているのである (Hayashi, 1987)。俱知安でも *C. propinqua* の雌雄は同時に同じ場所で採集されている。林が記載した *C. propinqua* の雌は、*C. hummeli* の雌とはまったく異なる。林とは独立に、1987年の当初には中国で別の *C. propinqua* の雌が記載されていて、いよいよ問題は複雑である (Song, 1987)。もっとも、この中国産の雌は体長が 2.6 mm しかないそうで、雄の 4.3 mm に比べて小さすぎるるので、誤りである可能性が高い。ちなみに北海道産の雌は 5.2 mm である。

この問題が片付くまでは、とりあえず、本種は *C. hummeli* としておいてよかろうと思われる。和名はまだつけられていない。谷川明男氏は本種の雌成体を広島県で採集している。

2 コシロカネグモの交尾栓

大木和生氏が 1989 年 8 月 5 日に座間市小池で採集したコシロカネグモ *Leucauge subblanda* 成体メスの標本の外雌器のところには、コハク様の赤褐色の分泌物が付着していた (図 2)。このような付着物は数種のクモのメス外雌器にときどき観察される。吉倉真はこれを交尾栓 (mating plug) とよんでいる。交尾栓には 2 種あり、ひとつはヤリグモ・シロカネイソウログモ・ササグモなどに見られる分泌物の固まりだけのもの、もうひとつはコガネグモ・オニグモ・アカオニグモ・クロフササグモなどの雄の移精器官の一部が取れて分泌液でくっつけられたものである (吉倉, 1982, 1987 : pp266-268, pp297-299.)。

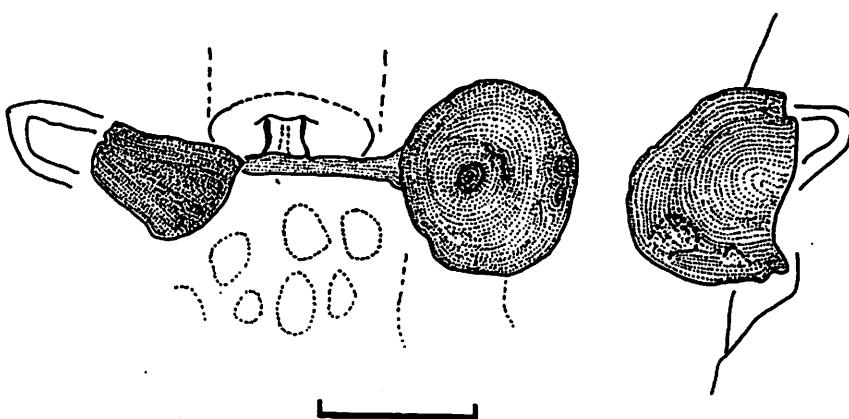


図2 コシロカネグモの交尾栓 (左: 腹面図、右: 側面図) スケールは 0.5 mm

交尾栓を持たない個体も多い。交尾栓の機能について、吉倉は(1)雌の再交尾を防ぐ、(2)精子の逸失を防ぐというふたつをあげている(吉倉, 1982)。

一度交尾すると他のオスを拒否するような(single mating の)メスでは、交尾栓の必要は無いわけである。交尾栓の見られる種は多回交尾が可能な(multiple matingな)メスの可能性もある。もっとも大部分のクモは処女メスしか交尾しないと思われているようだが、ある種が本当にsingle mating であることを確認することは容易ではない。24時間以内なら後オス(second male)とも交尾するような種も知られて来たからだ(Austad, 1982.)。それに交尾時間が一瞬でない場合は、たいていの雌は交尾中に無抵抗であるから、雄が変わっても気がつかない可能性もある。おそらくこのような交尾栓はやっぱりオスの側のメス確保戦略として発達してきたものであろう。それにしてもこの種の交尾栓を外すような機能を持つオスの戦略が進化していないように思えるが、それにはなんらかの理由があるのだろう。おそらくクモでは先オス優先機構が一般的であるためだろう。

座間市の標本では、コシロカネグモの他、藤野知弘氏採集のコゲチャオニグモ成体メス(1989年7月29日、座間市緑ヶ丘にて採集)にも分泌物による交尾栓が見られた。

3 尾の突出したフタオイソウロウグモ

本標本は大木和生氏が、1989年8月5日に座間市小池で採集したフタオイソウロウグモ *Argyrodes fur* 雌成体で、尾の先がふたつに分かれ、長く突出していた(図3)。尾の先端まで含めるとクモの体長は4.1mm、右側の尾だけの長さは基部から1.0mmであった。左側の尾は最初あったが、途中から折れてしまった。

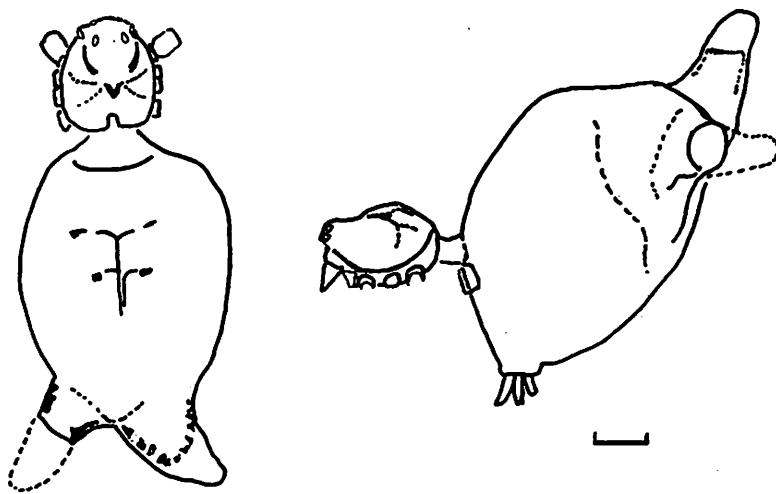


図3 フタオイソウロウグモ(左: 背面図、右: 側面図)脚は省略。スケールは0.5mm

4 ヤマトガケジグモの斑紋

ヤマトガケジグモ *Titanoeeca albofasciata* の腹背の紋様について、八木沼は「個体により対斑の数に変化があり、また欠くものがある」と記し、三対斑（白斑の小さいもの）・三対斑（白斑の大きいもの）・四対斑・六対斑の図を掲げている（八木沼, 1986）。中国では本種を「白斑隠蛛」と称し、ガケジグモ科を「隠石蛛科」と呼ぶ（Song, 1987）。

相模川岸の河原の石の下から得られた標本 16 個体は、白斑の大きい三対斑のもの（図 4）と、

二対斑のもの、無斑のものの三種類に分かれた（諏訪哲夫 1990 年 6 月 1 日採：無斑雄成体 1, 1990 年 6 月 17 日採：三対斑雌成体 1, 1990 年 8 月 1 日採：無斑幼体 1, 二対斑幼体 1, 三対斑幼体 1, 1990 年 8 月 13 日採：三対斑雌亜成体 1, 無斑幼体 1, 1990 年 9 月 24 日採無斑雌亜成体 1. 藤野知弘 1990 年 6 月 6 日採：三対斑雌成体 3・無斑雌成体 2・三対斑雌亜成体 1・無斑雌亜成体 2）。

幼体段階でも斑の区別が見られる。今回の標本には白斑のある雄はなかった。なお、千国の図鑑には六対斑の雄が挙げられており（千国, 1989），韓国では六対斑の雌の写真が撮影されている（Korean Arachnol. 5(2)のグラビア）。

図 4 三対斑のヤマトガケジグモ
腹部背面

このような斑紋多型のある種の存在は知られていても、これまでクモでは一部の種類を除いては、斑紋を類別することも、定量調査も行われてこなかった。しかし、私は型を鑑別分類し、記録することは誰にでも出来る大変大切な研究であり、限られた場所での定量調査も必要だと思っている（池田, 1989）。

5 イナダハリゲコモリグモ雄の触肢の内部

クモの成体雄の触肢の内部を膨出させるには苛性カリ処理を行うが、イナダハリゲコモリグモ *Pardosa agraria* の標本の中に苛性カリ処理をしないにもかかわらず、触肢内部が左右とも飛び出



図 5 イナダハリゲコモリグモ雄の左触肢 (a: 膨出していないもの, b: 膨出しているもの,
e: エンボルス) スケールは 0.25 mm

しているものがあった(図5 b. 1990年6月6日、座間市相模川河原にて、藤野知弘氏採集)。図は左の触肢の内面面である。ハリゲコモリグモ群 *Pardosa laura* complex (イナダハリゲコモリグモもこの群に含まれる)の触肢はどれも非常によく似ているが、内部を見ると、ずいぶん複雑な構造をしているものだと改めて感じる。収縮している時(図5 a)もこのようつながりが分かるような図が描ければいいのだが。

このような膨出がなぜ起ったのかは分からぬ。交尾中だったのだろうか。

6 マイコクログモは平地でも採集される

マイコクログモ *Clubiona rostrata* Paik は、林俊夫により *Clubiona maikoae* として記載された時に採集された環境が、標高 400 – 1400 m の落葉樹林 (deciduous forests) 内の低木下リーフ層だったために (Hayashi, 1985), その後の文献には本州では「高地性、山地性」と記されている (八木沼, 1986; 千国, 1989)。しかし、平地からもときどき採集される。このたび座間市の採集地は座間丘陵の一部である谷戸山、細い市道わきの雑木林で標高 70 m である。

神奈川県中郡二宮町でも、平地の川勾神社から採集されている (池田, 1990)。

参考文献

- Austad, S. N., 1982. First male sperm priority in the bowl and doily spider (*Frontinella pyramitela*). *Evolution* 36: 777–785.
- 千国安之輔, 1989. 写真日本クモ類大図鑑。東京。偕成社。308p.
- Hayashi, T. 1987. Some spiders of the genus *Clubiona* (Araneae: Clubionidae) from Hokkaido. *Bull. Biogeogr. Soc. Japan*, 42: 33–41.
- Hayashi, T. 1985. Two new species of the genus *Clubiona* Lettrellie, 1804 (Araneae: Clubionidae) from Japan. *Acta arachnol.*, 33: 35–43.
- 平塚クモの会. 1986. 平塚市の真正クモ類. 1 リストおよび分布. 自然と文化, (7): 75–102.
- 池田博明, 1990. 真正クモ類. 二宮町史資料編 1 自然, pp323–329.
- 池田博明, 1989. クモの多型について (I). 生物教育学雑誌, 1: 7–12.
- Kim, J. P., Lee, M. C. and J. R. Jun, 1987. Studies on the spiders overwintering in the straw mat round the roadside-tree I. With the roadside-tree of the Uijongubu and Yongin area as its center. *Korean Arachnol.*, 3: 51–59.
- Kim, J. P., Lee, H. P. and J. R. Jun, 1987. Species composition in the arthropod community overwintering in the straw band. *Korean Arachnol.*, 6: 127–138.
- Namkung, J. & Kim, J. P., 1987. A new species of Genus *Clubiona* (Araneae: Clubionidae) from Korea. *Korean Arachnol.*, 3: 23–28.
- Paik, K. Y. 1990. Korean spiders of the genus *Clubiona* (Araneae: Clubionidae) I. Description of eight new species and five unrecorded species from Korean. *Korean Arachnol.*, 5: 85–129.

Song, D. 1987. Spiders from agricultural regions of China. Beijing China. Agriculture Publishing House. 376p.

吉倉真, 1982. ササグモの貞操帯について. *Heptathela*, 2: 43-46.

吉倉真, 1987. クモの生物学. 東京. 学会出版センター. 613p.

八木沼健夫, 1986. 原色日本クモ類図鑑. 大阪. 保育社. 305p+p1. 64.

コゲチャハエトリの一種 *Sitticus* sp. 成体の出現期間

徳本洋

ここで取り上げるコゲチャハエトリの一種は *Sitticus* sp. として千国 (1989) の図鑑に雌雄成体や外部生殖器の写真が載せられているものである。そしてその説明文の中で、「成体は7~8月に出現する」と記されている。私は1990年7月に、金沢市久安の、ある建物の1階の窓ガラス上をしばしば這っている小型のハエトリが本種であることを知った。それでその成体出現期間に気をつけていたところ、7~9月には、雌雄それぞれが窓ガラス上に常に3~5ひきほど見られ、時には室内に入り込んでいた。しかし10月になるとその数が減り、特に雄が減ったけれども、気温が目立って下がった日を除いて、ほとんどの日に1~2ひきの姿が見られた。そしてこの年の最後にこのクモを見たのは雌雄ともに11月5日であった。この年の秋は平年より暖かい日が続いたが、そのことを考慮にいれて、金沢では7~10月が成体出現期間とみてよいと考えられる。

この建物のある地域は金沢市街地の南端で、建築物がどんどん増えつつあるが、まだかなり田畠が残っている。私がこのクモを見付けた建物の周囲にも、少ないながら水田や休耕田が残っている。この建物で、これまでに見つかったハエトリはオスクロハエトリが数回見つかっているだけで、金沢市内の家屋の外壁に普通なハエトリであるミスジハエトリやシラヒゲハエトリは見つかっていない。これらのことから考えると、本種はオスクロハエトリとともに、この建物に隣接する休耕田の草むらや水田に生息しているのかも知れない。

本種ならびにオスクロハエトリの同定をしていただいた松本誠治氏によると、本種に該当するかも知れないハエトリグモは4種ほどあるけれども、まだ種名を確定するには至っていないことである。いろいろご教示をいただいた松本氏にお礼申し上げます。

学校の教室にカタオカハエトリが

谷川明男

1990年5月19日、神奈川県立野庭高校の2年6組の男子生徒がクモがいたといって私のところへやってきた。もってきてくれたクモを見てみるとカタオカハエトリ (*Euophrys frontalis*) の雄の成体であった。生徒の話によると、授業中、ふと気がつくと、自分の机の上を小さなクモが歩いており、そのクモがきれいな色をしているのでこれは珍しいと思って、つかまえてもらってきてくれたとのことである。ちなみにカタオカハエトリは、ラインマーカーのキャップと本体の間にとじこめられて連れてこられた。

実は野庭高校の校内でカタオカハエトリが見つかったのはこれで2回目である。いつだったか正確な日付は忘れてしまったが、前回は私自身の授業中であった。その時には、生徒がクモがいるといって私を呼ぶので、机のところにいってみると、ノートの上をだいだい色の小さなハエトリが歩いていたのである。私は、その時まだカタオカハエトリを見たことがなかったので、その標本を松本誠治氏に見てもらい、カタオカハエトリと同定していただいたのである。

金鱗斑のないコガネヒメグモ

新 海 明

コガネヒメグモ *Chrysso venusta* は体全体が金鱗斑でおおわれた美しいクモである。このクモは採集するなどして刺激を与えると体色が瞬時に変化して金色から茶色になってしまう、いわゆる体色変化をするクモとしてよく知られている。

筆者は、1989年8月31日に静岡県駿東郡小山町須走においてコガネヒメグモの子育てを調査している際に、金鱗斑のない♀の成体を発見したので報告する。

このクモは子育て中であり、スズタケの葉裏に子グモと共に静止している時にも体色が茶色であった。筆者が知る限りでは、自然条件下での本種の体色変化は餌捕獲時に見られ（餌が網にかかると興奮したように体色を変えながら獲物に近づく）、葉裏に静止している時には金色のままなのが普通である。念のために、昼夜、朝方と三回にわけて観察したが静止している時にも常に体色は茶色であった。採集してよくみると、金鱗斑が消失しており、腹部を縁どる＜＞状の黒斑はみられた。また、子グモたちも大きさから推測すると金鱗斑が生じてもよい時期の幼体だったにもかかわらず、同様に茶色であったことから遺伝性のものと推察された。

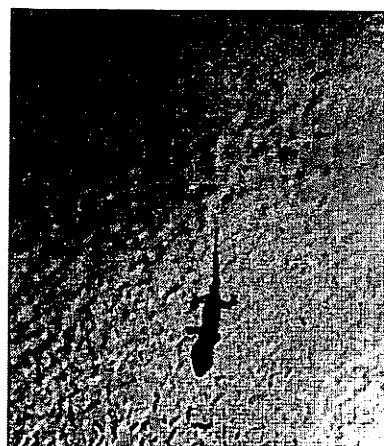
この個体は、この色彩変異を利用して個体識別ができるために子育てにおける母グモの認知を調べるための交換実験にもちいた。翌週に再び調査地を訪れたところすでにいなくなっていたため、残念ながら標本は残っていない。

オオヒメグモに吊されたヤモリ

中 島 晴 子

1990年9月下旬頃から、自宅（目黒区碑文谷）の玄関外の門灯の陰に棲むオオヒメグモ (*Achaearanea tepidariorum*) を観察していた。毎朝のように何か網に吊り下げられていて、下には乾いた虫が落ちていた。ハエ、ガガンボ、ウスバカゲロウ、カメムシ……etc.

10月4日の朝6時50分頃ドアを開けた私はわが目を疑った。体長（尾の先まで）5～6cmのヤモリが吊り上げられていたのだ。時折体を左右に激しく揺するのだがシッポの先の一点がしっかりと糸にからまれている。急いで写真を撮ったあと逃がしてやったが、後脚の片方がマヒしている様子だった。庭の草の中へ姿を消したが、もう助からないのだろうか？もし死んでしまうのだったら、オオヒメグモがせっかく苦労して得たエサを無駄にしてしまうだけの行為だったのだろうか？答をききたい気持ちです。



マルゴミグモとトゲゴミグモの分布について

谷川明男

現在、ゴミグモ類に興味を持ち、いろいろと調べているが、ここではマルゴミグモ *Cyclosa vallata* Keyserling, 1886 とトゲゴミグモ *C. mulmeinensis* (Thorell, 1887) の分布について、若干の知見を報告したい。なお、採集データについては文献からの引用はせず、自分で同定を確認した標本のみに基づいているので、いろいろな文献に示されている分布域とは違っていることをあらかじめご承知いただきたい。

1991年2月現在まで、私が同定したマルゴミグモの標本の産地は、東から神奈川県真鶴、和歌山県串本町、香川県国分寺町、高知県芳原、福岡県福岡、宮崎県宮崎、鹿児島県屋久島である。また、トゲゴミグモについては、西から沖縄県与那国島、波照間島、西表島、沖縄島、南大東島、鹿児島県沖永良部島、奄美大島である。すなわち、マルゴミグモは神奈川県から屋久島まで、トゲゴミグモは与那国島から奄美大島までで、両者が混在する地域はなく、両者の分布境界線は屋久島と奄美大島の間、渡瀬線にあるらしい。こうなると気になるのはトカラ列島である。渡瀬線は、トカラ列島のうち、悪石島と小宝島の間にひかれているが、マルゴミグモやトゲゴミグモはどのように分布しているのだろうか。マルゴミグモが北から悪石島まで、トゲゴミグモが南から小宝島まで生息しているとおもしろいのだが、機会があればひ確かめてみたいテーマである。また、もしお手元にトカラ列島産のマルゴミグモ、あるいはトゲゴミグモの標本をお持ちの方がおられたらぜひ拝見させていただきたい。

デニツツハエトリに捕食されたオウギグモ

平松毅久

1990年10月21日、神武寺の採集会に参加した際、オウギグモ *Hyptiotes affinis* (以下オウギ) が自分の網糸の上でクモに食べられているのを観察した。最初に見たとき、オウギが他のクモを食べているのかと思ったが、よく見るとオウギが捕えられているのであった。オウギを捕食していたのは、デニツツハエトリ *Plexippoides doenitzi* (以下デニツツ) 雌成体で、オウギの網の固定点（クモのいる側）と扇状三角網の要（支点）のほぼ中間、つまり細野善熙氏の「クモの習性」にある言葉を借りると「縫糸（みちいと）」上でオウギを捕らえていた。最初から見たわけではないので断定は避けるが、近くにいた池田博明氏の御意見では、網に獲物がかかったか何かでオウギが動いた拍子にその上方にいたデニツツが飛びかかったのではないかということであった。考えてみれば、摂食行動中は比較的無防備であり、またこの場合、オウギの縫糸には枯球がついておらず、デニツツの格好の餌食となったのも無理からぬことと言えよう。実際、自然界でこのようにしてオウギが捕食される確率はどのくらいかわからないが（あまりないとは思うが）、なかなか面白い観察例だと思い報告する次第である。

緑色のヒメグモ

平松毅久

伊豆大島へ旅行した会社の同僚より腹部が緑色のヒメグモがもたらされた。1990年10月15日、大島北西部でスギの枝に造網している処をきれいだという理由で採集され、筆者の手に渡る同月17日未明に産卵した（その後19日未明2回目の産卵）。最初ヒメグモの一種であることはわかったが、腹部が緑茶のような色を呈していたため同定できなかった。結局腹部の斑紋と卵のうの形態（球形）および色彩（灰褐色），そして網の下部がシート状になっていたという証言が決め手となって、このクモはヒメグモ *Achaearanea japonica* であることがわかった。一般的にヒメグモの腹部は赤褐色であることが多いので、この緑色のヒメグモは色彩変異かとも考えたが、1989年11月3日に高尾山で腹部が黒色のホシミドリヒメグモ *Cyrtosso puncifera* を採集したとき、数日後には淡緑色に戻ったことを思い出した。その折、食べた餌により腹部の色が変化することがある旨板倉泰弘氏に御教示頂いたが、このヒメグモもその可能性がある。果たして徐々に腹部の緑がくすんで茶色っぽくなり、もらって1週間後の24日には完全に元の（？）赤褐色に戻っていた。そこで先の同僚にどんな餌を食べていたか尋ねたところ、後日、半翅目昆虫のアオバハゴロモであることがわかった。アオバハゴロモは体部（頭、胸、腹）と前翅が青緑色の美しい昆虫で、セミに近縁である。アオバハゴロモの生態等については寡聞にして知らないが、大島ではこの時期（10月中旬）に多いらしく、ヒメグモの有力な餌資源となっている可能性もある。おそらくアオバハゴロモを食べたことによって腹部が緑色になったのであろう。Gillespie (1989) の報告では、ハワイ産ヒメグモの一一種 happy-fase spider では食後5~10秒後で腹部に色彩が到着、一分以内に色素が行きわたり、平均2.7日後に排泄されるとのことだが、ヒメグモでは食べてからどれ位の時間で色が変わり、また脱色するのか今後の研究課題として残る。最後にこの場を借りてクモを採集して頂いたBMLの坂本真紀子さん他4名に厚く御礼申し上げる。なお、蛇足ながら、ヒメグモ科はクモ嫌いの女性にも人気が高く、イメージアップ作戦の一環としてヒメグモ科のクモをイメージ・ガールに起用すべきである。

勉強会の場所を間違えた入会者

永田勝利

ある時、筆（毛筆）を作る名人が、「動物の毛であれば、珍獣や人間の体毛などでも毛筆になるが、蜘蛛の糸だけはまったく筆にはできないし、原形を手中に取ることさえ困難である。」と語っていた。このことから、私は蜘蛛に興味を持つようになり、自分なりに蜘蛛の糸に挑戦してみたくなっていろいろと試してみた。

第一回目

蜘蛛の巣に霧吹きで水を吹き付けてみた。

— DRAGLINES —

吹き付けた水は水玉となり糸が鮮明に浮き上がった…………成功。

第二回目

ジョロウグモの網全体に前方および後方から青スプレーを吹き付け、30分および60分待機。原形あり。スカイブルーの真珠玉のように浮き出たが、糸の元から厚紙を当てて巣を取ろうとしたところで破壊してしまった…………失敗。

結果として、一種類だけのスプレーでは糸は固まらないことがわかった。

第三回目

蜘蛛はネバネバする特殊な液を出すことに気がつき、この糸のネバネバを取り除くために、着物のしみぬきに使用するシリコンスプレーを使ってみた。

原形を崩すことなくとれた…………成功。

第四回目

蜘蛛のしおり糸を引く習性を利用してみた。竹の枝をV型に切り取って先端に蜘蛛を乗せ、竹の枝をゆっくり回転させながら蜘蛛を移動させて糸の造形を作り出した。この竹の枝と造形の糸にシリコンスプレーとゴールドメタリックスプレーを吹き付けた…………成功。

試行錯誤の連続ですが、皆様の研究とまったく違うことをしているのに気がつきました。

ホルストジョウゴグモにかみつかれた

谷川明男

1990年12月29日、沖縄県の西表島において採集したホルストジョウゴグモ (*Macrothele* sp.) を現在飼育中である。

大体このホルストジョウゴグモというのは気が荒い。飼育水槽のなかで、人影を感じると肢を振りあげ、だいだい色の牙を開いて威嚇する。あんまり肢を振りあげすぎてひっくりかえってしまったこともある。しかし、これはまだ自分の巣を作る前のことで、巣が完成すれば状況は少し変わってくるだろう。今までの飼育経験でも、自分の巣を持っているものでは、人影などを感じるとさっと隠れ家に逃げ込んでしまうものばかりだった。ところが、隠れ家にすばやく逃げ込める状況にないとひらきなおるのである。体が大きく、体色はまっくろだし、おまけに牙だけがだいだい色をしているので、けっこう不気味なものである。

先日、このクモにかまれた。

ある朝、保湿のために入れてある脱脂綿に水を含ませてあげようとした時のことである。クモは脱脂綿のすぐそばにいた。そして、私が手を水槽に入れようとすると例の威嚇姿勢だ。まあ、そっと取り出せば、そのままの格好でいるか手が触れればあわてて逃げるだろうと思っていたら、ガップとかまれた。それはあっという間のできごとで、かみついたクモはもうもとの威嚇姿勢にもどっている。かまれたときの痛みはあまり強くなかった。痛さはアシダカグモにかまれたときのほうが強

DRAGLINES

い。すこしたつと、かまれたところがしびれるような感じをもちだした。かみついたのは親指のつめのつけねらしい。二ヵ所、しびれ具合でわかる。そのあたりをつめで押してみるとちくりと痛みが走る。このしびれるような感じはそのまま夜まで続き、夕食時にビールを飲むと他の部分より赤くなった。風呂に入るともっと赤くなり、少し腫れた。と、思ったのだが、あとで冷静にながめてみると、私の親指は左右で少し太さが違っていた。だからホルストのせいではなかった。そして、翌朝起きると何も感じなくなっていた。

カバキコマチグモに咬まれた一記録

諏訪哲夫

カバキコマチグモは夏、ススキの葉を巻いて産室をつくり、母グモはこの産室の中で自分の肉体を子グモに提供して死んで行きます。つまり、ふ化した200頭余りの子グモは親の体を食いつくして巣立っていくのです。

私は子供の頃、チマキのようなカバキコマチグモの産室を農道や、林縁でたびたびみたことがあります。これがカバキコマチグモの産室であることは、植村利夫氏の「親を喰う蜘蛛」という文章によって知ったように思います。植村氏がカバキコマチグモの産室内の状況を観察されたのは1940年（昭和14）、東京都井の頭公園でのことで、私が氏の文章を読んだのは1949年（昭和24）のことです。

座間市のクモ類調査をはじめてから、カバキコマチグモはピーティング法（樹木の枝をたたいて落下するクモを集めめる方法）でごく普通に記録されています。しかし、私はススキの葉を巻いた産室を座間ではみていません。まだ観察が不十分だと思っています。

ところで、私はこのクモに自分の家の室内で手痛く咬まれ、かなりのショックをうけました。それは昨年（1990）6月18日、夕方の7時頃でした。テレビを見ていたとき室の入口の上の方から、アシナガグモかと思われるようすに肢の長いクモが糸を伝って下りてきました。私は捕えようと右手でつかんだところ、親指の腹に激痛を感じたのです。それは、アシナガバチに刺されたような痛みでした。クモは何とか管ピンへ収め、指の様子をみることにしました。親指は関節の先が赤くはれ、痛みは指のつけ根あたりまで及んできました。アルコールで局部を拭いたりしましたが、かなりの痛みが40分程続き、1時間半後にはやくペンを持つことが出来ました。それから2週間程して、右手親指の腹に5ミリ位の小さく固い部分のあるのに気づきました。いろいろ考えた結果、過日クモに咬まれた後が角質化したものと分かりました。

私は、カバキコマチグモが室内へ入りこむなど予想もしていなかったので、最初アシナガグモかと思ったのですが、ルーペの観察でカバキコマチグモであることが分かりました。後日、さらに正確に同定して頂いた池田博明氏にお礼を申し上げます。

一般にクモが人を咬むことは稀なことだと思いますが、カバキコマチグモは例外のようです。新海栄一氏（1984）によると、「日本では最も毒性の強いクモで、咬まれると半日から1日ほど痛む」とのことです。吉倉真氏（1987）は害虫としてのクモの項で、クモ刺咬症について述べて

DRAGLINES

います。また、普通種のコクサグモが獲物を助けなくする毒素は、アミノ酸35個からなるペプチドで、この物質に萩原健一氏がアゲレニンと命名したと昨年（1990）8月、新聞で知りました。カバキコマチグモの毒素については、麻生大学の鶴田明子氏が卒業研究でセロトニンなどの成分を検出されているが未発表であると池田博明氏よりご教示をいただきました。

ゴミグモとシロカネイソウロウグモ

熊田憲一

1990年8月14日、三浦半島野比（横須賀市）の山で採集をしていたときのこと。畑に接する林の崖地の木陰にある薄暗い大きなエグレの中にゴミグモ *Cyclosa octotuberculata* Karsch の網を見付けた。それまでも道沿いでいくつかこのクモを見ていたが、皆比較的明るいところに造網していたので、こんなところに網を張るのは性格の暗い奴だな、と思いつつゴミリボンを見るとクモがいなかった。よく見るとクモは網の左下側（8時の方向）の網の中心と枠糸の中間ぐらいに、頭を放射線の外側に向けて止まっていた。餌でも取りに出てきたものと見ていたが、全然動く様子がない。何となくいつもと違う感じがした。急に暗いところに首を突っ込んだためよく見えていたのだが、目が慣れてくるとちょっとクモと反対側のところに餌が掛かっているのがわかった。食事がだいぶ進んでいたようで、餌は原形をとどめていなかった。餌があるのにクモが逃げるとはシリアゲムシにでも強奪されたのかと餌を調べたが、シリアゲムシはいなかった。しかし、別ものが餌の裏側で動いているのが見えた。脇から覗きこんだら、それはシロカネイソウロウグモ *Argyrodes bonadea* Karsch の大きく立派な雌であった。後ろが暗いのと、餌の塊の黒とシロカネイソウロウグモの腹部の黒が合間って、ちょっと判らなかった。脇から覗くと銀色の腹部が暗い中に鈍く光っていた。顔が糸に触れてちょっと網が動いたくらいでは全く動ぜず、餌に食らいついでいた。

ゴミグモ—餌—シロカネイソウロウグモの三角関係と見ると興味がわく。状況から見て、食事中に強奪されたのは明らかである。どうやらゴミグモはよほど恐ろしい思いをしたようだ。シロカネイソウロウグモの仕業だろうか。

しかし、別の見方ができるかもしれない。餌がゴミリボンの中でなく網の途中にあったということは、やはりシリアゲムシに強奪された後にシロカネイソウロウグモがやってきたとも言えるからだ。ジョロウグモ等の網に居候しているときの彼らに思い当たる節があろう。網主が不穏な動きをするとスッと糸を引いて身の安全を確保するぐらい用心深い。

シロカネイソウロウグモ・・・いつもは用心深い小心もの、でも本当はなかなか世渡り上手の強心臓なのかも知れない。

なお、この地ではこのほかにゴミグモの網にシロカネイソウロウグモが入りこんでいるのは見られなかった。（ジョロウグモ・オオシロカネグモ・コガネグモ・コガタコガネグモの網にいるのは確認した。）

西表島のクモ類採集記録 Ⅱ

谷 川 明 男*

Spiders from Iriomotejima-Isl and Ⅱ

Akio Tanikawa*

は じ め に

1983年3月より、機会あるごとに沖縄県の西表島（いりおもてじま）を訪れ、クモ類の観察・採集を続けている。1989年7月までに種名を明らかにすることができた104種の種名と採集データについては前に報じた（谷川, 1989）が、その後、1990年9月現在までに、24種の追加すべきものと1種の種名を変更すべきものが明らかになったので統報としてここに報告する。今回追加する24種のうち、11種はOno (1989), Ono and Saito (1989), Tanikawa (1989), Ono and Tanikawa (1990)によって新種として発表されたものであり、5種は田中(1989), Tanikawa (1989), 谷川 (1990)によって日本新記録として発表されたものである。残りの8種のうち、7種は前報までの段階で採集されてはいたが同定を保留していたもの、1種はその後あらたに採集されたものである。今回の訂正、追加により筆者の西表島における調査において得られたクモ類のうち、種名の明らかなものは128種となつたが、採集された種の半数以上がいまだに種名不明のままである。

なお、本論に先立ち、セスジアカムネグモの同定についてご教示いただいた田削幸子氏に厚くお礼申し上げる。

種名を変更すべきもの

前報（谷川, 1989）において記録した76. *Pirata procurvus* (Bös. et Str., 1906) チビコモリグモについては、その後 Tanaka (1989) によって新種として発表された *Pirata iriomotensis* Tanaka, 1989 イリオモテコモリグモであることが判明したので、ここに種名を変更する。なお、前報中に掲げたデータの標本すべてがイリオモテコモリグモだったので、ここでは追加すべきデータのみ記す。

76. *Pirata iriomotensis* Tanaka, 1989

イリオモテコモリグモ

900103♀, 900502♂, 900503♀.

* 神奈川県立野庭高等学校 〒233 横浜市港南区野庭町1660

追加すべきもの

以下に追加すべき 24 種の種名とデータを掲げるが、記述の方法は前報と同様である。すなわち、科の配列は八木沼（1986）に従い、科内での種の配列は学名のアルファベット順、採集日については西暦の 19 を省略して年・月・日にそれぞれ 2 ケタずつをあて 6 ケタで表記し、雌成体は♀、雄成体は♂、幼体はyで表し、個体数は省略、Bösenberg et Strand は Bös. et Str. と略記した。なお、種名の前の番号は前報につづけて 105 より始める。

Theridiidae ヒメグモ科

105. *Argrodes fur* Bös. et Str., 1906 フタオイソウロウグモ
 850330♀, 870810♀, 870813♀, 870824♀, 870826♂,
 890101♂.

106. *Pholcomma amamiense* Yoshida, 1985 アマミカブトヒメグモ
 891231♀, 900501♀♂, 901224♀,

107. *Spheropistha melanosoma* Yaginuma, 1957 クロマルイソウロウグモ
 880818♀, 900501♀.

Linyphiidae サラグモ科

108. *Oilinyphia peculiaris* Ono et Saito, 1989 ケナガサラグモ
 880328♀♂, 881230♀♂, 900102♀♂.

109. *Ummeliata insecticeps* (Bös. et Str., 1906) セスジアカムネグモ
 田副幸子氏同定。
 860329♀♂, 860327♀♂, 901224♀♂, 910103♀♂, 910104♀,
 910107♀.

Araneidae コガネグモ科

110. *Araneus viridiventris* Yaginuma, 1969 ハラビロミドリオニグモ
 860331y, 861228y, 871229y, 900103♀.

111. *Larinia fusiformis* (Thorell, 1877) ネッタイコガネグモダマシ
 850818♀, 860326♂, 860329♀♂, 870101♀♂, 870401♀,
 870823♀, 880328♀♂, 880329♀, 890329♀, 901225♀,
 901228♀.

112. *L. onoi* Tanikawa, 1989 ムネグロコガネグモダマシ
 861228♂, 870823♀, 871227♀, 880331♀, 890102♀,
 890330♀, 890331♀.

113. *L. phthisica* (L. Koch, 1871) ミナミコガネグモダマシ
 861228♀♂, 861231♀♂, 860401♀, 870101♀, 870104♂,
 870328♀♂, 870401♀♂, 870822♀, 870823♀, 871228♀♂,
 880104♀, 880816♀♂, 880819♂, 880824♂, 890327♀,

890329♀♂, 890330♀♂, 890331♀.

Tetragnathidae アシナガグモ科

114. *Leucauge crucinota* (Bös. et Str., 1906) チビシロカネグモ
830330♀♂, 830401♀, 830402♀, 840501♀, 850327♀,
850328♀, 850329♀, 850330♀, 850331♀, 850810♀,
850811♀, 850812♀, 850813♀, 850816♀, 851227♀♂,
851230♀♂, 860102♂, 860329♀, 860330♀♂, 870806♀,
870807♀, 870826♀, 870815♀♂, 870823♂, 871229♀,
880329♀, 880816♀, 880819♀, 890331♀, 890401♀,
891227♂, 900103♀, 900430♀, 900501♀, 900502♀,
900503♂, 901225♀, 910101♀.

115. *L. decorata* (Blackwall, 1864) トガリシロカネグモ

840502♀, 850811♀♂, 870101♀, 870821♀, 870823♀,
871227♀, 900429♀, 910103♀.

116. *Tetragnatha chauliodus* (Thorell, 1890) ヒルギアシナガグモ

870812♀, 871228♂, 890101♂.

117. *T. praedonia* L.Koch, 1878 アシナガグモ

900501♀.

Zodariidae ホウシグモ科

118. *Langbiana fulvipes* Ono et Tanikawa, 1990 ヒアシホウシグモ

850812♀♂, 870823♀, 880103♀♂, 880104♀♂, 880329♂,
880824♂, 880825♂, 880822♂, 890330♀.

119. *L. shimojanai* Ono et Tanikawa, 1990 ヤエヤマホウシグモ

830330♀, 850330♀♂, 850813♀, 860401♀, 870331♀,
870401♀, 900502♀♂.

Lycosidae コモリグモ科

120. *Pardosa oriens* (Chamberlin, 1924) ヒガシコモリグモ

850330♀♂, 850401♀, 850812♀, 850816♀♂, 860328♀,
860329♀♂, 861231♂, 870328♂, 881230♀♂, 890328♀,
890402♂, 891226♂, 910107♂.

Clubionidae フクログモ科

121. *Clubiona cirrosa* Ono, 1989 マキヒゲフクログモ

880815♂, 890103♀.

122. *C. insulana* Ono, 1989 シマフクログモ

871227♂.

123. <i>C. kurosawai</i> Ono, 1986	クロサワフクログモ			
891228♀.				
124. <i>C. ryukyuensis</i> Ono, 1989	リュウキュウフクログモ			
860330♀♂, 860401♂, 870328♀, 870806♀,	861228♀, 871227♂,	861230♀♂, 890330♂,	870327♀, 910102♀.	
125. <i>C. tanikawai</i> Ono, 1989	タニカワフクログモ			
851228♀, 851230♀, 860102♀, 860103♂, 860329♀♂,	860331♀, 860401♂, 861229♂, 861231♂, 870327♀♂,	870809♂, 871229♂, 880103♀, 8801231♀,	870810♀, 8801230♀, 891230♀, 900430♀,	
870328♂, 870330♀, 870401♀, 880329♀♂, 880824♂,	870823♀, 870824♀, 871227♀, 880101♂, 890328♀♂,	870824♀, 881229♀, 890330♀♂, 890501♂, 900502♀,	871229♂, 881230♂, 891227♂, 900503♀, 901225♂,	
900103♀, 900501♂, 900502♀, 901225♂, 910102♂.				
126. <i>C. ultramarina</i> Ono, 1989	アオミフクログモ			
851230♀, 860328♀, 861230♀, 870104♀♂, 890329♂.				
127. <i>C. viridula</i> Ono, 1989	クサイロフクログモ			
850327♀, 850329♂, 850330♂, 850401♂, 850810♂,	850819♀, 860329♀♂, 860330♀♂, 860401♀♂, 861228♀,	870327♀♂, 870328♂, 870330♀♂, 870807♂, 880328♂,	880824♀, 880825♀, 890328♂, 890329♀♂, 890330♂,	
890401♀, 900501♀, 900502♀.				
Salticidae ハエトリグモ科				
128. <i>Myrmarachne japonica</i> (Karsch, 1879)	アリグモ			
850327♀, 850331♀, 850401♀, 850813♀, 850816♀,	851229♂, 860329♀, 860330♀, 870101♂, 870104♂,	870327♀, 870806♂, 870809♀, 870810♀♂, 870820♂,	870826♂, 880401♀, 890101♂, 890328♀, 890330♀,	
891231♂, 900102♂, 900501♀♂, 910102♀♂.				

引 用 文 献

- Ono, H., 1989. New species of the genus *Clubiona* (Araneae, Clubionidae) from Iriomotejima Island, the Ryukyus. Bull. Natn. Sci. Mus., Tokyo, Ser. A, 15 (3): 155-166.
- Ono, H. and H. Saito, 1989. A new Linyphiid spider from the Ryukyu Islands, Southwest Japan. Bull. Natn. Sci. Mus., Tokyo, Ser. A, 15 (4): 231-234.

- Ono, H. & A. Tanikawa, 1990. A revision of the Japanese spiders of the genus *Langbiana* (Araneae, Zodariidae). *Mem. Natn. Sci. Mus., Tokyo*, (23):101-102.
- Tanaka, H., 1989. A new species of the genus *Pirata* Sundevall (Araneae: Lycosidae) from the Ryukyu Islands, Japan. *Bull. Biogeogr. Soc. Japan*, 44: 109-110.
- 田中穂積, 1989. 日本から得られた *Pardosa* (オオアシコモリグモ属) の未記録種および1新シノニム. *Atypus*, (93) : 10-15.
- 谷川明男, 1989. 西表島のクモ類採集記録 I. *Kishidaiia*, (59) : 25-44.
- Tanikawa, A., 1989. Japanese spiders of the Genus *Larinia* Simon (Araneae: Araneidae). *Acta arachnol.*, 38:31-47.
- 谷川明男, 1990. 日本新記録種 *Tetragnatha chauliodus* (Thorell, 1890) および *Leucauge decorata* (Blackwall, 1864) について. *Atypus*, (95) : 8-13.
- 八木沼健夫, 1986. 原色日本クモ類図鑑. 305 pp. 保育社, 大阪.

菅平のクモ類採集記録

田 副 幸 子* ・ 谷 川 明 男*

Spiders from Sugadaira, Nagano Pref.

Sachiko Tazoe* and Aki o Tani kawa*

神奈川県立野庭高等学校の生物部では、1980年から1989年まで夏季5回にわたり長野県小県郡真田町菅平にて動植物の観察調査を行なった。ここでは、その際に採集されたクモ類の採集記録を報告する。

菅平は根子岳（標高2195m），四阿山（標高2333m）の南西に広がる草原性の高原（標高の平均1300m）で、噴火によって塞き止められてできた沼（菅平湿原）や沢もあり、広さは南北約10km、東西7kmに及ぶ。標高が高いため低緯度でありながら年平均気温は6.2℃と低く、特に昼夜の温度差が大きい。降雪が11月から4月までつづくが、年間降水量は約1100mmと少なめである。

根子岳の山腹はカラマツの植林とシバザサの草原が混在し、標高1700m付近からはダケカンパ林となる。さらに頂上付近ではハイマツ、クロマメノキ等の高山性の植物が見られる。根子岳につづく広大な斜面は草原で冬季にはスキー場になる。さらに高原レタス、アスパラガスなどの耕作地が広がっている。菅平湿原は一番低所にあり、観察当初は水量も多く湿性植物も多く見られたが、年を追うごとに陸生化がすすみ、草丈の高い多年生草本類が目立つようになってきた。

採集はハンドソーティングによっておこなった。

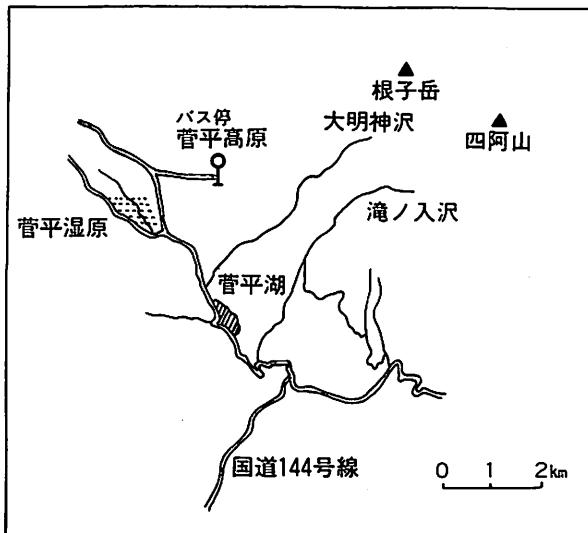
採集日、採集者は以下のとおりである。

1980年7月27日～7月30日	飯島寿子 上野妙子 森美也子 谷川明男 田副幸子
1981年8月 1日～8月 4日	飯島寿子 上野妙子 森美也子 谷川明男 田副幸子
1984年7月21日～7月24日	堀由起子 谷川明男
1988年7月23日～7月26日	谷川明男 田副幸子
1989年7月27日～7月30日	谷川明男 田副幸子

目 錄

目録の作成にあたって、科の配列は、八木沼（1986）に従い、科内での種の配列は学名のアルファベット順とした。採集日については西暦の19を省略して年・月・日にそれぞれ2ヶタずつをあて6ヶタで表記し、雌成体は♀、雄成体は♂、幼体はyで表し、個体数は省略した。なお、Bösenberg et StrandについてはBös. et Str.と略記した。

* 神奈川県立野庭高等学校 (〒233 横浜市港南区野庭町1660)



菅 平 略 図

Uloboridae ウズグモ科

1. *Uloborus yesoensis* (Saito, 1934) エゾウズグモ
800727♂♀, 800728♀, 800729♀, 800730♀, 840721♀,
840724♀.

Theridiidae ヒメグモ科

2. *Achaeareana kompirensis* (Bös. et Str., 1906) コンピラヒメグモ
810802♂, 840721♀.
3. *A. tabulata* Levi, 1980 オオツリガネヒメグモ
800727♂♀, 800728♀, 800729♂♀, 810803♀, 840723♀.
4. *A. tepidariorum* (C. Koch, 1841) オオヒメグモ
800727♂♀, 800728♀, 800729♀, 810803♀, 880724♀.
5. *Argyrodes saganus* (Dön. et Str., 1906) ヤリグモ
880724♂♀,
6. *Chrysso punctifera* (Yaginuma, 1960) ホシミドリヒメグモ
890730♀.
7. *Dipoena castrata* Bös. et Str., 1906 ボカシミジングモ
800728♀, 800729, 840722♀, 880726♀.
8. *D. mustelina* (Simon, 1888) カニミジングモ
800729♀, 810802♂, 880723♀.
9. *D. punctisparsa* Yaginuma, 1967 シモフリミジングモ
810802♀, 880724♀, 880726♂.
10. *Enoplognatha japonica* Bös. et Str., 1906 ヤマトコノハグモ

	800728♀,	800729♀,	810801♀,	810804♀,	880724♀.
11.	<i>E. margarita</i> Yaginuma, 1964			シロタマヒメグモ	
	800727♀,	800728♀,	800729♀,	810802♂♀,	840721♂,
	840722♂♀,	880723♀,	880724♀,	890729♀.	
12.	<i>Episinus kitazawai</i> Yaginuma, 1958			シモフリヒシガタグモ	
	800728♂,	800729♀,	840723♀,	880723♂.	
13.	<i>Theridion chikuni</i> Yaginuma, 1960			バラギヒメグモ	
	840722♀,	890727♀.			
14.	<i>T. lyricum</i> Walckenaer, 1841			シモフリヒメグモ	
	800727♀,	880724♀,	890730♀.		
15.	<i>T. nigrolimbatum</i> Yaginuma, 1972			タカネヒメグモ	
	810825♀,	880724♀.			
16.	<i>T. pinastri</i> L. Koch, 1872			ムナグロヒメグモ	
	800727♀.				
17.	<i>T. sterninotatum</i> Bös. et Str., 1906			ムナボシヒメグモ	
	880724♀.				
18.	<i>T. subadultum</i> Bös. et Str., 1906			コケヒメグモ	
	800729♀,	840723♀.			
19.	<i>T. takayense</i> Saito, 1939			タカユヒメグモ	
	800727♀,	800728♀,	800730♀,	810802♀,	840721♀,
	840722♀,	880723♀,	880724♀,	880725♀,	880726♀.
	Linyphiidae サラグモ科				
20.	<i>Bathyphantes orientis</i> Oi, 1960			テナガグモ	
	880724♀.				
21.	<i>Erigone prominens</i> Bös. et Str., 1906			ノコギリヒザグモ	
	880724♂,	880725♀,	880726♀.		
22.	<i>Erigonidium graminicora</i> (Sundevall, 1829)			クロナンキングモ	
	800727♀,	800729♀,	800730♀,	810801♀,	810804♀,
	840721♀,	880724♀.			
23.	<i>E. nigriterminorum</i> Oi, 1960			ハシグロナンキングモ	
	800729♀,	810802♀,	840724♂♀,	880723♀.	
24.	<i>Floronia bucculenta</i> (Clerck, 1758)			ハナサラグモ	
	840723♀.				
25.	<i>Leptyphantes azumiensis</i> Oi, 1980			アズミヤセサラグモ	
	800727♂,	800728♂.			
26.	<i>Linyphia angulifera</i> Schenkel, 1953			ハンモックサラグモ	
	880724♀.				

27. <i>L. clathrata</i> Sundevall, 1830			コウシサラグモ
800729♀, 880724♀.			
28. <i>L. japonica</i> (Oi, 1960)			ツリサラグモ
800727♀, 800729♀, 880724♀,	890727♀.		
29. <i>L. longipedella</i> Bös. et Str., 1906			アシナガサラグモ
800728♀.			
30. <i>L. marginella</i> (Oi, 1960)			コシロブチサラグモ
810802♂♀, 810803♀, 840722♀,	880723♂♀, 880724♂♀,		
880725♀.			
31. <i>L. radiata</i> Walckenaer, 1841			シロブチサラグモ
800728♀.			
32. <i>Strandella quadrimacurata</i> (Uyemura, 1937)	ヨツボシサラグモ		
880724♀.			
33. <i>Ummeliata angulituberis</i> (Oi, 1960)			コトガリアカムネグモ
800730♀, 880724♂♀, 880726♂♀.			
Araneidae コガネグモ科			
34. <i>Araneus abscissus</i> (Karsch, 1879)			キザハシオニグモ
880723♀.			
35. <i>A. ishikawai</i> Kishida, 1928			イシサワオニグモ
810802♂, 840723♂.			
36. <i>A. pinguis</i> (Karsch, 1879)			アカオニグモ
800728♀.			
37. <i>A. rotundicornis</i> Yaginuma, 1972			マルコブオニグモ
880724♂.			
38. <i>A. ventricosus</i> (L. Koch, 1878)			オニグモ
800727♀, 800728♀, 800729♀,	810801♀, 810804♀,		
890727♀, 890730♀.			
39. <i>A. fuscocolorata</i> (Bös. et Str., 1906)			ヤミイロオニグモ
800727♀, 800729♀, 890724♀,	890727♀.		
40. <i>Argiope bruennichi</i> (Scopoli, 1772)			ナガコガネグモ
800727y.			
41. <i>Cyclosa atrata</i> Bös. et Str., 1906			カラスゴミグモ
800729♂.			
42. <i>Hypsosinga sanguinea</i> (C. Koch, 1845)			シロスジショウジョウグモ
800728♂, 840722♀, 880723♀,	880724♀.		
43. <i>Metleucauge yunohamensis</i> (Bös. et Str., 1906)	メガネドヨウグモ		
800728♀, 800730♀, 810804♀,	840722♀, 880724♀.		

44. *Neoscona adianta* (Walckenaer, 1802) ドヨウオニグモ
 800727♂♀, 800728♂♀, 800730♀, 810804♀, 840721♀.
 45. *Pronous minutus* (Saito, 1939) コオニグモモドキ
 800728♀, 800729♀, 810802♀, 840722♀, 840723♀,
 880726♀.
 46. *Singa hamata* (Clerck, 1758) ナガテオニグモ
 800728♀, 880724♀.
 47. *Zilla sachalinensis* (Saito, 1934) カラフトオニグモ
 800727♀, 800728♀, 800729♀, 800730♀, 810802♀,
 840722♀, 890727♀.
 Tetragnathidae アシナガグモ科
 48. *Leucauge subblanda* Bös. et Str., 1906 コシロカネグモ
 800727♀, 800729♀, 840721♂♀.
 49. *L. subgemmea* Bös. et Str., 1906 キララシロカネグモ
 800729♀, 840722♀.
 50. *Tetragnatha maxillosa* Thorell, 1895 ヤサガタアシナガグモ
 800727♀, 800728♀, 800729♀, 800730♀, 840722♂♀,
 880724♀, 890727♀.
 51. *T. pinicola* L. Koch, 1870 ミドリアシナガグモ
 800727♀, 800728♂♀, 800729♀, 800730♂♀, 810802♂♀,
 810804♀, 840721♂♀, 840722♂♀, 880724♀, 890727♀.
 52. *T. praedonia* L. Koch, 1878 アシナガグモ
 800729♀.
 53. *T. squamata* Karsch, 1879 ウロコアシナガグモ
 800727♀, 840721♀.
 54. *T. yesoensis* Saito, 1934 エゾアシナガグモ
 800730♂, 840722♂.
 Agelenidae タナグモ科
 55. *Agelena labyrinthica* (Clerck, 1758) イナズマクサグモ
 880725♂♀.
 56. *Coelotes luctuosus* L. Koch, 1878 メガネヤチグモ
 810803♀.
 Lycosidae コモリグモ科
 57. *Alopecosa pulverulenta* (Clerck, 1758) チリコモリグモ
 800729♀, 810803♀, 840722♀, 840723♀.
 58. *Hygrolycosa umidicola* Tanaka, 1978 シッチコモリグモ
 800727♀, 880724♀.

59. *Pardosa astrigera* L.Koch, 1878 ウツキコモリグモ
800727♀, 800730♀, 840721♀, 840723♀, 880724♀,
890727♀.

60. *P. brevivulva* Tanaka, 1975 ヤマハリゲコモリグモ
800728♀, 880723♀, 880724♀.

61. *P. laura* Karsch, 1879 ハリゲコモリグモ
800727♀, 800728♀, 800729♀.

62. *P. lugubris* (Walckenaer, 1802) エゾコモリグモ
800727♀, 800728♀, 800729♀, 800730♀, 810802♀,
810803♂, 810804♀, 840722♀, 840723♀, 840724♂,
880723♀, 880724♂, 880725♀, 880726♀, 890728♂.

63. *P. paramushirensis* (Nakatsudi, 1937) タカネコモリグモ
880725♂.

64. *Pirata piratoides* (Bös. et Str., 1906) イモコモリグモ
880726♂.

65. *Xerolycosa nemoralis* (Westring, 1861) モリコモリグモ
800727♀, 800729♀, 840722♂, 880723♂.
Clubionidae フクログモ科

66. *Chiracanthium erraticum* (Walckenaer, 1802) アカスジコマチグモ
840722♀.

67. *C. japonicum* Bös. et Str., 1906 カバキコマチグモ
800728♂, 800729♀, 880723♂, 890729♀.

68. *Clubiona flavigipes* (Saito, 1939) キアシフクログモ
810822♀, 840722♀, 840724♀.

69. *C. japonica* L. Koch, 1878 ヤマトフクログモ
800728♀.

70. *C. jucunda* (Karsch, 1879) ヤハズフクログモ
840723♂.

71. *C. kurilensis* Bös. et Str., 1906 ヒメフクログモ
800728♀, 800729♀, 810804♀, 840721♀, 880723♀.

72. *C. lena* Bös. et Str., 1906 トビイロフクログモ
800727♀, 800729♀.

73. *Phrurolithus claripes* (Dön, et Str., 1906) イナズマウラシマグモ
880724♀.

74. *P. nipponicus* Kishida, 1914 ウラシマグモ
880725♀.

Heteropodidae アシダカグモ科

75. *Micrommata virescens* (Clerck, 1758) ツユグモ

800728♀, 800729♂, 810803♂.

Gnaphosidae ワシグモ科

76. *Callilepis schuszteri* (Herman, 1879) フタホシテオノグモ

880724♀.

77. *Kishidaia albimaculata* (Saito, 1934) ヨツボシワシグモ

880724♀.

Thomisidae カニグモ科

78. *Diae a subdola* O. P.-Cambridge, 1885 コハナグモ

800729♀, 880726♀, 890729♂.

79. *Lysiteles coronatus* (Grube, 1861) アマギエビスグモ

840724♀, 880723♀, 890727♀.

80. *L. maius* Ono, 1979 タカネエビスグモ

810802♀.

81. *Misumenops tricuspidatus* (Fabricius, 1775) ハナグモ

800727♀, 800728♀, 800729♀, 810803♀.

82. *Tmarus rimosus* Paik, 1973 セマルトラフカニグモ

800727♂, 800728♀, 810802♀, 810803♀.

83. *Xysticus bifidus* Paik, 1973 クロボシカニグモ

800728♀.

84. *X. ephippiatus* Simon, 1880 シナカニグモ

800729♂.

85. *X. kurilensis* Strand, 1907 チシマカニグモ

800728♂, 800729♂♀, 810802♂, 810804♀, 840723♂♀,

880724♂♀.

Philodromidae エビグモ科

86. *Philodromus aureolus* (Clerck, 1758) コガネエビグモ

800729♀.

87. *P. flavidus* Saito, 1934 キエビグモ

800729♀, 880725♀.

88. *Tibellus oblongus* (Walckenaer, 1802) スジシャコグモ

800727♂♀, 800728♂♀, 800729♂♀, 810802♂, 810803♂,

810804♀, 840721♀, 840722♂♀, 880723♂, 880724♂♀,

880725♂, 890728♀.

Salticidae ハエトリグモ科

89. *Evarcha albaria* (L. Koch, 1878) マミジロハエトリ
800729♂, 880724♀.
90. *E. flammata* (Clerck, 1758) ホオジロハエトリ
800728♀, 840722♂.
91. *Heliophanus aeneus* (Hahn, 1831) チビクロハエトリ
840723♀, 880724♂, 880726♀.
92. *Marpissa pomatia* (Walckenaer, 1802) ヤバネハエトリ
840722♀, 880725♀.
93. *Phintella difficilis* (Bös. et Str., 1906) マガネアサヒハエトリ
800728♀, 800729♀, 800730♀, 880723♀, 880724♀,
890729♀.
94. *P. linea* (Karsch, 1879) メガネアサヒハエトリ
800728♂♀, 840723♀, 880725♀.
95. *Yaginumaella ususudi* (Yaginuma, 1972) ウススジハエトリ
880724♀.

引　用　文　献

八木沼健夫, 1986. 原色日本クモ類図鑑. 305pp. 保育社, 大阪.

編集後記

62号が完成しました。会員の皆様のご協力のおかげで、たいへん豊富な内容になったと思います。特にドラッグラインのコーナーにたくさんの原稿が集まつたことがなによりです。これからもますます多くの方々から原稿がいただけますよう、よろしくお願ひいたします。クモについて観察したこと、いえ、ちょっと気がついたことでも結構です。結論は要りません。疑問の投げ掛けもいいのです。とにかく日本でクモのことを見ている人は少しあいません。いま、あなたが気づいたこと、疑問に思ったことはおそらくまだだれも考えついていないことだと思います。みんなに発表しましょう。小野展嗣さんがよく口にされる言葉に「知ってしまった者の責任」というのがあります。わたしはこの言葉が大好きです。また、池田博明さんの言葉には「アンタはあした死んじゃうかもしれないよ」というのがあります。他の人が知らないことを知ってしまった以上、それを発表することは観察者・研究者の責任なのです。またこんどそのうちなどと思っているうちに月日はあっという間に流れ、発表の機会を失ってしまうこともけっこう多いのです。さあペンをとりましょう。さあ、ワープロの電源を入れましょう。そういえば野口英世もこんなことを言っていたそうです。「どんなにたくさんのことを見ていたとしてもそれを発表しなければ何も知らないのと同じだ。」



<1990年・1991年度運営委員>

池田 博明・板倉 泰弘・稻葉 茂代・小野 展嗣・熊田 憲一・笹岡 文雄・新海 明・
高橋 登・高橋 祐子・谷川 明男・萩本 房枝・

代 表：萱嶋 泉 191 東京都日野市多摩平7-15-9

本 部：小野 展嗣 169 東京都新宿区百人町3-23-1 国立科学博物館動物研究部内

会誌編集：谷川 明男 223 神奈川県横浜市港北区新吉田町1523

通信編集：池田 博明 258 神奈川県足柄上郡大井町金手1099

事務局（会計）：熊田 憲一 221 神奈川県横浜市神奈川区片倉町199

郵便振替 東京 7-74885

会計監査：加藤輝代子・松浦 祐司

KISHIDAIA № 62

1991年8月15日印刷

編集者 谷川 明男

1991年8月16日発行

発行者 萩島 泉

発行所 東京蜘蛛談話会

東京都新宿区百人町3-23-1 国立科学博物館動物研究部 小野 展嗣方

印刷所

イチカワ印刷所

〒357 埼玉県飯能市新町24-7

KISHIDAI
Bulletin of Tokyo Spider Study Group

No.62 Aug. 1991

目 次

新 海 明	ツクネイダモの造網行動	1
眞 元 巴 良	蜘蛛の発見・採集法のあれこれ	3
諏 託 哲 夫	ジョロウグモの棲息数調査	9
諏 託 哲 夫	わら巣きの中で越冬するクモの一記録	11
池 田 博 明	座間市のクモ調査ノート (II)	13
DRAGLINES		
徳 本 洋	ラグチャハエトリの一種 <i>Sitticus</i> sp. 成体の出現期間	19
谷 川 明 男	学校の教室化丸ダオカハエトリが	19
新 海 明	金輪郭のないヨシネヒメグモ	20
中 島 銘 子	オオヒメグモに吊るされたヤエリ	20
谷 川 明 男	マルゴミグモをトテゴミグモの分布について	21
平 松 緑 友	云ニツツバエトリに捕食されたオウキグモ	21
平 松 緑 友	緑色のヒメグモ	22
永 田 駿 利	勉強会の場所を間違えた入会者	22
谷 川 明 男	ホルストショウゴクモにかみつかれた	23
諏 託 哲 夫	カベキヨマチグモに吸まれた一記録	24
相 田 恵一	ヨミグモとシロカネネコロウグモ	25
谷 川 明 男	西表島のクモ類採集記録 (I)	26
田 副 幸 子・谷 川 明 男・音 平	の クモ類採集記録	31
編 集 後 記		39